

第15回「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式 京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウム

開催結果概要

1 趣旨・目的

「京都議定書」誕生の地である京都において、世界で地球環境の保全に多大な貢献をされた方の功績を顕彰するとともに、京都から世界に向けて広く発信することにより、あらゆる国、地域、人々の地球環境問題の解決に向けた意志の共有と取組に資することを目指す。

2 日時

2024年10月14日（月・祝）午後1時～5時

- | | |
|---------------------------|---------|
| (1) 「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式 | 午後1時～2時 |
| (2) 京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウム | 午後2時～5時 |

3 場所

国立京都国際会館・RoomA（京都市左京区岩倉大鷲町422）

4 内容

(1) 「KYOTO 地球環境の殿堂」表彰式



オープニング・アトラクション

京都フィルハーモニー室内合奏団のみなさまに演奏いただきました。

ア 表彰式

「KYOTO 地球環境の殿堂」運営協議会の山極壽一会長より、第15回殿堂入り者に対して、認定書及び記念品を授与しました。



<第15回殿堂入り者>

甲斐沼 美紀子 氏（公益財団法人地球環境戦略研究機関(IGES) 研究顧問）

パーサ・ダスグプタ 氏（ケンブリッジ大学 フランク・ラムゼイ記念名誉教授）

山岸 哲 氏（山階鳥類研究所 名誉顧問）



<授与者>

山極 壽一 会長（総合地球環境学研究所 所長）



※パーサ・ダスグプタ氏はビデオメッセージ

イ 記念スピーチ

第15回殿堂入り者より、殿堂入りに係る記念スピーチをいただきました。



(ア) 甲斐沼 美紀子氏

1.5℃目標達成にむけた施策の検討にあたっては、多くの方々のお世話になった。特にアジア太平洋統合評価モデル（AIM）を開発してきたアジアの仲間からは、各国での目標達成における提案をいただいた。基本モデルが完成した後は、アジアの研究者にモデルを引継ぎ、彼ら自身がデータを集め、モデルを動かす支援をしてきた。



(イ) 山岸 哲氏

これまで自分が幸せになるために研究を続けてきた。気候変動については、これまで深く考えてこなかったように感じるが、今回参加されている高校生に恥じぬよう、今回を機会に心を入れ替え、温暖化の問題を自分事として捉えていきたい。



(ウ) パーサ・ダスグプタ氏

生物圏における経済学の研究は、40年以上にわたって私の研究の中心であったため、KYOTO地球環境の殿堂入りという賞をいただき、大変光栄であり、感謝している。あらゆる角度から、私のこの分野の功績を考えてくださったことは、とても素晴らしいことだと思う。

(2) 京都環境文化学術フォーラム国際シンポジウム

「地球と人間が共存する未来～ネイチャーポジティブの実現へ～」をテーマにシンポジウムを開催しました。

ア 記念講演

第 15 回殿堂入り者より、自身の取組等に関する記念講演をいただきました。

(ア) 甲斐沼 美紀子 氏



アジアにおける温室効果ガスの排出の増加が見込まれることから、アジアを対象とした温暖化対策を検討するアジア太平洋統合評価モデル (AIM) を開発した。AIM における排出のモデルについては、技術選択モデルや物資フローモデル、経済モデルなどに気候モデルなどを組み合わせており、中身は常に更新され詳細になってきている。1.5°C目標を達成する

ためには、温室効果ガスをゼロにする必要があり、再生エネルギーの活用や、メタンガスの排出を抑制するなどすべきことが明確である一方、安価な電気の使用や雇用の維持など各々の事情から、温室効果ガスゼロの実現には至っていない。特に、現在、アジアでは大気汚染が非常に深刻であるが、気候変動問題を解決することは大気汚染問題の解決につながる可能性がある。低炭素社会を実現するためには様々な課題が存在し、一般市民の方々の協力が不可欠である。是非、皆様にも、気候変動問題解決にむけて取り組んでもらいたい。

これまで革新的な技術やインフラ整備、資金の確保など、取り組むべき課題が存在する中、2015年にパリ協定が採択され、その後も、1.5°C社会の実現にむけて活動を続けてきた。これまで共に活動されてきた方々に心から感謝をしたい。

(イ) 山岸 哲 氏



マダガスカルには、そこでしか見られない固有種が多く、マダガスカル内において、魚類は 40 種類、両生類や爬虫類では約 90%以上が固有種となる。鳥類においては、200 種類のうち約 50%が固有種となる。日本に生息する鳥類は、600 種のうち、固有種が 6 種類のみであるため、いかにマダガスカルには固有種が多いかということがわかる。また、マダガスカルでは、固有科が 5 種も存在し、そのうちの一つにオオハシモズ科がある。

嘴（くちばし）や大きさが非常に多様であり、マダガスカルに滞在した際、これらが本当に 1つの仲間なのか疑念を抱いた。これまで学者は、頭骨の形態や顎筋のつき方などを比較することで 1つの科と判別してきた。しかし科の判別には形態のみでは不十分であると考え、我々は採血を行い、系統分離を行った。その結果、分析した全ての種類が 1種から分岐していたということが判明し、形態分類をした学者の素晴らしさを改めて感じた。今では、我々の研究に刺激され、世界中の研究者が採血を行い、新たなオオハシモズ科の種類が発見されている。

また、マダガスカルにおける素晴らしい生物多様性は、マダガスカル人によって守られるべきだと考え、マダガスカルの子供に対して興味を持ってもらうことを目的に、鳥類図鑑を制作の上、お送りした。こうした私の取組は、沢山の方に支えられてきた。改めて感謝を申し上げたい。

(ウ) パーサ・ダスグプタ 氏 ※ビデオメッセージ



開発経済学における貧困の研究には、自然への考慮が欠けている。これまで成長しながらも損失され、破壊される可能性のある生物圏については全く言及されてこなかった。しかし、自然は資本であり、人間が利用するサービスや商品を生み出している。これらの考えが私の頭の中をめぐり、環境の視点を通じて、深刻な貧困を理解しようとした。問題は、自然を過小評

価していたことであり、人々も自然に対して、価値がないかのように扱ってきた結果、ひたすら自然を利用するようになったことである。私はかなり早い時期に経済学の教授となり、アフリカの乾燥地帯や不規則な降雨に直面する貧困家庭のジレンマのモデル化を示してきた。私がやろうとしていたことは経済モデルを生物圏に組み込むことで、生物圏が付加的なものではなく不可欠なものとなるようにすることであった。生物圏は、互いに補完し合う幅広い活動を生み出す非常に複雑な動的システムであるため、ある活動やプロセスのひとつを破壊すると、他のプロセスも破壊され、代替不可能となる。自然が損なわれつつある今、われわれの需要と自然の供給のバランスをどうとるか。この提起こそが私の報告書である『生物多様性の経済学』の目的であり、人類が生物圏との取引で直面している課題を可視化するために試みた方法である。

イ 府内高校生のピッチセッション

気候変動に関する専門家による3回の勉強会を通じて理解を深めた府内高校生より、学んだことを元に1～2分間のプレゼンテーションを実施いただきました。

また、甲斐沼 美紀子 氏、山岸 哲 氏からは、各校のプレゼンテーションについて、コメントをいただきました。



<登壇高校>

京都府立福知山高校

京都市立開建高校

京都府立桂高校

京都府立宮津天橋高校

京都市立西京高校

京都府立北陵高校 ※ビデオ放映

京都府立嵯峨野高校 ※ビデオ放映



<コーディネーター>

吉川 成美 氏 (総合地球環境学研究所上廣 環境日本学センター センター長・特任教授)



ウ 殿堂入り者とのトークセッション

パーサ・ダスグプタ 氏と宇佐美 誠 氏（京都大学大学院地球環境学堂教授）との対談を上映しました。

宇佐美 誠 氏におかれましては、本トークセッションを行うにあたり、事前にケンブリッジ大学まで訪問いただき、上映前に一言ご挨拶をいただきました。



<参加者>

パーサ・ダスグプタ 氏（第15回殿堂入り者）

宇佐美 誠 氏（京都大学大学院 地球環境学堂 教授）



エ パネルディスカッション

「持続可能な未来を描く」をテーマに甲斐沼 美紀子 氏と山岸 哲 氏、またパネリストである山極 壽一 氏、府内高校生との相互質問・回答を中心とするパネルディスカッションを行いました。



<パネリスト>

甲斐沼 美紀子 氏（第15回殿堂入り者）

山岸 哲 氏（第15回殿堂入り者）

山極 壽一 氏（総合地球環境学研究所所長）

<登壇者>

京都府立福知山高校（1名）

京都市立開建高校（3名）

京都府立桂高校（3名）

京都府立宮津天橋高校（4名）

京都市立西京高校（2名）



<コーディネーター>

吉川 成美 氏（総合地球環境学研究所上廣環境日本学センター センター長・特任教授）



5 パネル展示等

公益財団法人地球環境戦略研究機関（IGES）／いであ株式会社／公益財団法人国際高等研究所／京都府地球温暖化防止活動推進センター／株式会社大垣書店



6 当日のアーカイブ動画

<https://www.youtube.com/watch?v=--1GNj5j260&t=6481s>



7 主催・構成団体

(1) 「KYOTO 地球環境の殿堂」運営協議会

京都府、京都市、京都商工会議所、環境省、人間文化研究機構総合地球環境学研究所、公益財団法人国際高等研究所、公益財団法人国立京都国際会館

(2) 京都環境文化学術フォーラム

京都府、京都市、京都大学、京都府立大学、人間文化研究機構総合地球環境学研究所、人間文化研究機構国際日本文化研究センター